

# インドネシア歴史紀行

駒井 隆夫



ボロブドゥール遺跡の威容

20年ぶりにインドネシアを訪れた私は、真っ先にジャワ原人=ピテカントロプス=エレクトスの化石が展示されているジャカルタの国立博物館に立ち寄った。人類最古の祖先と対面したとき、数十万年の時空を超えて当時の様子が感動を伴って鮮やかに蘇ってくるのだった。大小1万7千余の島々と約300の種族からなるインドネシアは実に多様な国である。4世紀以降は仏教、ヒンズー教、イスラム教の王朝が興亡を繰り返し、17世紀初頭にはオランダ東インド会社が設立され、350年にわたって植民地支配を受けるといふ歴史的経緯も多様性の形成に影響を及ぼしているものと見られる。

また近年では、1955年に中部ジャワのバンドンで日本を含む29カ国が参加して「アジア・アフリカ会議」が開かれている。民族の独立と人種平等、世界平和などを謳った平和十原則が決議され、世界にインパクトを与えたこの会議には、本学の名誉教授で国連大使を歴任された加瀬俊一氏が日本の特命全権大使として参加されている。

**インドネシアの世界遺産** インドネシアにはユネスコの世界遺産に登録されている「ボロブドゥール」と「ランパナン」の二大遺跡がある。ボロブドゥールは1千年以上もジャングルに埋もれているところを1814年に発掘されたが、この巨大石造建築は高さが42m、最下部の基壇は一辺が124mにも及ぶ世界でも最大級の仏教遺跡である。建造物全体が仏教の宇宙観を表しており、参拝者は下段から順に、精緻な浮き彫りが描かれている回廊を巡りながら釈迦の教えを学び、上段に登るにつれて心の平安が得られるように造られている。幽邃境に佇むボロブドゥールの巨大遺跡はミステリアスな古代世界のロマンを掻き立てて止まない。一方、天空に燃え上がる巨大な焔のようなランパナンの遺跡群はインドネシア最大のヒンズー教寺院である。ブラフマー、シヴァ、ヴィシュヌのヒンズー三大神が祀られ、森羅万象に神が宿るといふ宗教観が近寄りがたいほどの神々しい雰囲気醸し出している。聖堂の周囲にはインドの古代叙事詩「ラーマヤナ」のレリーフが彫られ、見

る者をヒンズー神話の世界に誘ってくれる。

境内では、ボランティアでガイドをしているという3人の女子高校生に出会ったが、彼女らは日本の遺跡や文化財に対しても関心がある様子で、お互いの文化や国民性について理解し合う良い機会でもあった。

**昔日の面影を残すスラバヤ通り** ジャカルタ市内には美術骨董品や古道具類などを揃えている店が何百メートルも並んでいる一郭がある。スラバヤ通りである。民芸品や伝統工芸品からオランダ植民地時代の骨董品に至るまで、稀少価値のものもあり一見に値する。

今や東京や上海にも遜色のないほどの高層ビルが林立し、近代化目覚ましいジャカルタの中にあって往日の面影を留め、鄙びたスラバヤ通りを散策すると何かホッとさせる安らぎの気分に充たされるのである。

**多彩なバティックの文様** 19世紀初頭から王宮文化とともに発展をみたバティック（ジャワ更紗）は、地域によって華やかな色彩の花鳥柄や幾何学模様、中国やインドの影響を受けたデザインなど様々で、多様性の国インドネシアの特色がバティックにも色濃く反映されている。街で色とりどりのバティックを着けた女の姿を見ると動く絵を見ているようで興味深いものがある。

こまい たかお（元図書館職員・前参事）

## 本学図書館所蔵のインドネシアに関する図書 （歴史・旅関係）

- インドネシア歴史と現在（サイマル出版会）
- インドネシア独立への道（井村文化事業社）
- 嵐の前のインドネシア（井村文化事業社）
- インドネシア現代史（中央公論社）
- インドネシア民主化の光と影（朝日新聞社）
- 知っておきたい戦争の歴史（つくばね舎）
- スカルノとスハルト（岩波書店）
- バリ・インドネシア自遊自在（日本交通公社出版事業部）
- ブルーガイド わがまま歩き バリ・ボロブドゥール（実業之日本社）
- 地球の歩き方・インドネシア（ダイヤモンド・ビッグ社）